

出産と世話の現象学へ

森 一郎（東北大学）

『存在と時間』でハイデガーは、「可能性」を、実存カテゴリー——われわれ一人ひとりがそのつどそれである存在者たる「現存在」の存在規定——として重んじ、「最も根源的で最終的な、現存在の積極的な存在論的規定性」だとした。この可能性重視の考え方は、死を可能性として概念規定するさいに、端的に表われる。すなわち、「最も固有で、没交渉的で、確実に、それでいて無規定的な、追い越しえない、現存在の可能性」。この「実存一般の不可能性という可能性」が、徹頭徹尾「可能性として持ちこたえられる」ような、本来的な「死への存在」のことを、ハイデガーは「死への先駆」と名づけ、かつ、そこから汲みとられた「有限的時間性」を、存在論の基底に据えたのだった。

ハイデガーを読むとは、この「終わりへの存在」の思想にどう付き合うか、という問いを突きつけられることを意味する。そこから目を逸せば「非本来的」だと判別されることまで、ご丁寧に織り込み済みである。だが、ハイデガーの最良の読み手たちは、へびに睨まれたカエル然と死の前に佇むことを潔しとせず、それとは別様の実存理解へと赴いていった。ここに、ハイデガー以後の現象学の可能性が拓かれたのである。

そのハイデガー自身、『存在と時間』の歴史性の章で、「終わりへの存在」とは別に、「始まりへの存在」という言い方をしており、「誕生の哲学」がそこに胚胎していたことが分かる。始まりに着目しつつ「出来事について」思考することを、ハイデガーとは別の仕方で引き受けた現象学者の一人が、アーレントである。『人間の条件』で、「可死性 (mortality)」に匹敵する人間の条件として「出生性 (natality)」を打ち出し、「政治哲学の中心カテゴリー」に据えたのは、明らかに、ハイデガーとの対決を志してのことであつた。その場合、「可能性」——これが昂じると「必然性」と化す——というより、むしろ「偶然性」——その行き着くところ「不可能性」に極まる——が、様相として重視されることになる。ハイデガーとアーレントの間に、九鬼周造の偶然論を差し挟むメリットのあるゆえんである。

死が、老衰して末期を迎えるときにはじめて問題となるのではなく、可能性としてつねにすでに誰にも切迫しているように、誕生は、生まれたての赤ん坊のみを特徴づけるのではなく、われわれが世界に参入しあらたな始まりを迎えることが、そのつど「第二の誕生」なのである。生まれ出ずる者たちの孕む「出生性」がそのように、ふと——「独立なる二元の邂逅」のはずみで——現実化することが、イコール「活動」なのだ。伸るか反るかのアクションは、不発や挫折や破滅を引き起こす危うさを秘めている。

「可能性の実現」モデルと似て非なる「偶然の出来事」は、それゆえ、不確定性を免れない。事を為す者は、^{ポテンシャル}可能事にとにかく挑んでみるという勇氣ある率先行動のみならず、^{アクシデント}偶然事を持ちこたえるというねばり強い構えを、いったん事が為されるや否や、のちのち

まで求められる。偶然性の根絶が活動そのものの否定である以上はそうである。そうした事後的耐久力は、交わされた「約束を守る」という活動に如実に表われるが、それにとどまらず、活動全般を時間的に制約するものである。始まりは、生み出されたあと、助けられ、支えられ、育まれ、守られることで、はじめて始まりとして成就する。

始まりを生み出すことは、単独で為しうることではない。「独立なる二元の邂逅」から出来する活動は、「複数性 (plurality)」を条件とする。このことは、事後的にもそうである。誕生という出来事が、赤ん坊を受け入れる側なくしてありえないように、あらたな始まりは、それがあとあとまで存続するように、保たれ、受け渡されてゆくべきなのである。放っておけばすぐ滅びてしまう人間の業を保持してゆくには、多くの人びとの協力が不可欠であるだけでなく、個々人の生死を超えての連係プレーが求められるのである。

ここに浮上してくる問題現象が、「世代 (generation)」であり、E. H. エリクソンの言葉を借りて言えば、「世代出産性 (generativity)」である。この「ジェネラティヴィティ」の概念を、一個の実存カテゴリーとして彫琢することが肝要である。

世代という実存現象は、出生性と複数性を条件として成り立つが、それだけではない。一定の世代に属する者として生まれ育つことが、「被投性」に規定されていることを意味するのは、言うまでもない。さらには「可死性」も、世代の条件に属する。もちろん、旧世代が退場しなければ次世代の参入が阻害されるということもあるが、それだけではない。死すべき者たちが、おのれの退場ののちにも、現にある世界が存続することを欲し、そのために尽力する、ということが、世代交代の可能性をとともに形づくるのである。世代交代は、断絶と継承の双面をそなえているのである。

終わりへの存在が、みずからの終わりを先取りしつつ、別の始まりを産み、育てること——これは、「死への先駆」の変奏ではないだろうか。言いかえれば、「死への存在」の本来形の一つではあるまいか。もしそうだとすれば、かの「先駆的決意性」をどう解するか、という解釈上の難問に取り組むうえでも、それなりの示唆が与えられるだろう。

生まれることが、産むことと一つであるように、始めることは、始まりを迎え入れ、榮えさせ、見守ることと一つである。終わりへと差しかけられた死すべき者たちの協力、助力、介助が、始まりを真の始まりたらしめる。ここでは、「有限性 (Endlichkeit)」は「原初性 (Anfänglichkeit)」と拮抗しつつ一対である。「始まりの時間性」は、有限的時間性と組みをなして時熟し、出来事としておのずと本有化される。時間性相互のこうした絡み合いは、「共 - 存在時性 (Co-Temporalität)」と称されるにふさわしい。

助け、存続させるという仕方での「させるはたらき」は、余計なお世話ではなく、「存在させること＝あるがままにあらしめること (Seinlassen)」である。介助というこの事後的契機は、看護や介護のみならず、事を為すことに、それどころか物を作ることにも見られる。作られた物は、それが使われ続けてゆくためには、そのつど手をかけられ大事にされねばならない。物が物となるためにこそ、われわれは物を物として労わるのである。

総じて、世代＝出産＝性には、生み出されたものを「世話すること」が属する。われわれはここで、「出産と世話の現象学」の可能性に際会しているのである。